



わが国財界の大立者

郷古 潔

郷古潔は、地域の教育者であった郷古玉三郎、ゆうの長男として、

一八八二年（明治十五年）に水沢の不断町で生まれた。潔が生まれたときは、生家は商家でしたが先祖は仙台藩伊達氏の一門である留守家に仕えた藩お抱えの医者でした。旧制盛岡中学校（現・県立盛岡第一高等学校）を経て、旧制第一高等学校（現・東京大学教養学部）東京帝国大学法科大学法律科（現・東京大学）に進学した。

一九〇八年（明治四十一年）、東大を卒業し、すぐ三菱合資会社に入社した。入社直後に九州の炭鉱へ転勤を命じられた。一九一八年（大正七年）、三菱合資会社は三菱商事と社名を変更。潔は、大正七年に庶務課課長、八年に中国漢口（中国湖北省）支店長、若松支店長になりました。一九二一年（大正十年）には三菱系列の三菱造船総務課長になった。一九二五年（大正十四年）には三菱造船神戸造船所副長となり、一九二八年（昭和三年）には三菱造船取締役、一九三四年（昭和九年）には三菱系列会社の三菱重工常務、一九

三八年（昭和十三年）には、大日本航空会社常務となった。そして一九四一年（昭和十六年）には三菱重工業に戻り、社長に就任した。このように三菱財閥の各社で勤務し、トントン拍子に出世を遂げた。

盛岡中学時代の潔の同期生には、素晴らしい仲間がいた。小野寺直助（医学博士・九州大学学長）や田子一民（衆議院議長・農林水産大臣）野村胡堂こと長一（大衆小説家で音楽評論家）及川古志郎（海軍大臣）乙部孝吉（東京女子高等師範学校教授）金田一京助（文学博士で文化勲章受章）遠藤政直（横浜工大教授で工学博士）らと首席を争った。

潔の夢は政治家だったようだ。しかし、第一高等学校の時代に「役人も軍人もけしからん」と思うようになり、実業界へ進路を定めた。一九四一年（昭和十六年）、東條英機内閣の書記官長・星野直樹から頼まれて、内閣顧問（七人の中の一人）となった。しかし、三菱の総帥岩崎小彌太に相談しないで決めたため怒りを買って、「三菱人は政治に関与せず（三菱の会社の役員は政治活動に関わったり、類似団体に参加したりしてはいけない）」の伝統を破ったとして社長を解任されたが、株主総会で会長になった。

そのころ日本では、戦争への道を進みつつあって、潔は国家主義、

ファシズム体制の戦略的指導者に押し上げられ、大政翼賛会の生産拡充委員長務めることとなった。また日本経済連盟会理事・科学技術審議会委員・大日本飛行協会理事や大蔵省理財局参与などの役職も兼ねるようになった。

三菱重工業は各種兵器の製作、特に航空機生産に全力を傾け、日本の戦力増強の大きな支えとなっていた。郷古は入社以来、石炭部門から商事、さらに造船へと、日本のために産業を盛んにすることに力を注いできた。しかも、太平洋戦争は、大型戦艦を使つての戦いから、空母・航空機を使つての戦いに変つていった時代でした。航空機を作つても作つても、航空機は不足していた。郷古が三菱重工業社長として航空機の増産に自ら指揮を取るのは当たり前のことであつた。

これは東条内閣の戦局ばん回にとつても絶対的な条件でした。そのために郷古を内閣参与にさせ、その知識と経済人としての戦略を航空協会理事として航空業界の一致協力を求める必要に迫られていた。一九四四年（昭和十九年）に航空工業会副総裁に就任したのもそのためでした。そして、内閣顧問就任を転機に産業経済界の第一線を離れ、対外折衝に専念するようになった。

郷古は、かつて欧米諸国の業界をくわしく見て回つた体験にもと

づく豊かな見識を持ち合わせた。米英仏および中国その他の列強国を相手にしての戦争は、短期間ならともかく、長期にわたる戦争を続けることは無理なことも見通していたにちがいない。

ついに終戦約一年前の一九四四年（昭和十九年）には、東条内閣の総辞職もあり、大政翼賛会総務と内閣顧問を辞任した。

一九四五年（昭和二十年）日本は戦争に負けた。三菱重工業会長はじめその他の役職をすべて辞めた。同年十二月、連合国より第三次戦犯指名され、A級戦犯として逮捕され巣鴨刑務所に収監された。連合国総司令部渉外局は「三菱重工業社長郷古潔氏が東條家に対して現金、株式その他によつて総額一千万円を贈与した」等の調査結果を発表した。一九四六年（昭和二十一年）に国際軍事裁判を受けたが、容疑が晴れ帰宅を許された。一九四七年（昭和二十二年）には、戦時中の役職が原因で公職追放などの処分を受けた。一九五一年（昭和二十六年）、追放解除となつた。

このころすでに三菱とは関係がなくなつていたが、再び経済界の先輩役として、日本工業クラブ専務理事や財団法人航空協会会長になつた。また、貿易輸出会議委員や交通審議会委員、日本原子力産業会議顧問、国鉄諮問委員、日本政界評議員、岩手県の東北電気製鉄監査役も引き受けた。

さらに、日本生産性本部顧問、日本国際連合協会評議員、航空審議委員会などの役職にもつき、戦後日本の産業経済の発展のために持てる力のすべてをささげた。

そのかたわらで、在京岩手学生会の会長も長期にわたり務めた。そして金集めにはやりがちな学生幹事たちを戒め、困難や苦勞に耐える精神を学生たちに話して聞かせた。

実業界から敗戦時の政治の世界へ踏み込んだ郷古。平和のために多くのことを成し遂げた一生であった。

一九六一年（昭和三十六年）四月、七十八歳で病死した。

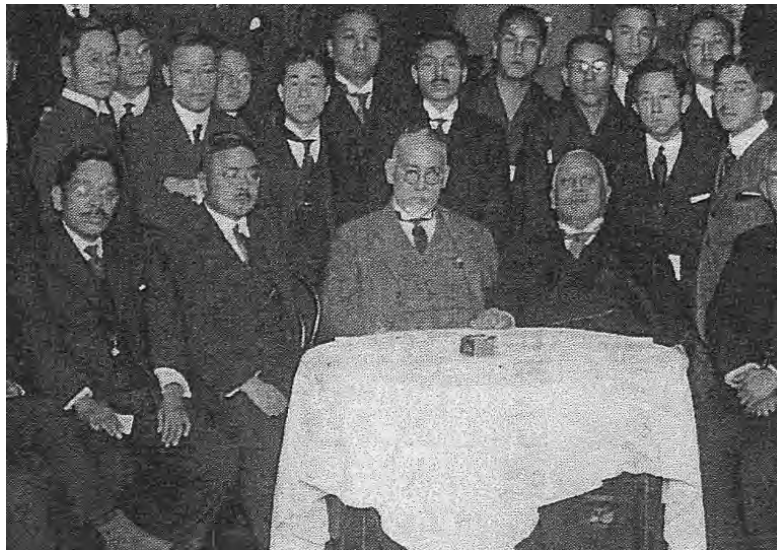
*参考文献

『岩手の先人一〇〇人』

三浦宏 岩手日報社

『歴史と観光みずさわ浪漫』

水沢市観光協会



後藤新平、齋藤實を囲んだ東京水沢会記念写真
前列左端（斐章）、2人目（郷古潔）